０３・【耳舐め】おやすみ前のあまあま耳舐め手マン

『０２・おうち着いてすぐ、甘えんぼ授乳手マンでイかせてもらう』から二時間ほど後。
場所は、主人公の自宅内寝室。

主人公とイヴはあれからシャワーも浴びて、もう眠る所である。
イヴ、玄関では主に攻める側だったが、シャワーではたっぷり、ねっちりと攻められ、犯され、何度もイかせてもらったので大満足。
今でも膣内がじーんと熱くなっている事にひそかに興奮しながら、未だ続く快感の余韻にうっとりと浸っている。
正直な所、できる事なら、ベッドでもまだセックスしたい。
だけど、さすがにもう寝る時間だ。
なのでイヴは、もうすでに布団に入り、眠る姿勢の主人公に話しかける。

ＳＥ１　イヴが布団をめくる音
【最初から最後まで流す】

●中央　少し遠い
「【少し甘々、少し浮かれた感じで。
基本的には穏やかないつものトーンだが、嬉しくて浮かれている。
現在のイヴは、トラック０２の後、シャワーを浴びる時に沢山いたずらされ、めちゃくちゃに犯してもらったのでとても満足している。
でも実は、つい数十分前の事であるにも関わらず、先ほどのセックスを思い出すだけで発情してしまい、また触ってほしくもなっている。
だから、もう一回したくないと言えば嘘になるが、さすがにそれは頼めない。
なので、こんなに気持ちよくしてくれた主人公に感謝して、もう眠るつもり】
じゃ、電気消すよ先生♥」

しかし、予想に反して、主人公はまだ物足りなさそうだ。
さっき、少し休んでからシャワーを浴びたために、目が覚めたのだろうか。
相変わらずまだ酔っているかのような雰囲気だが、意識ははっきりしているらしい。
物欲しげな目でイヴを見つめてくる。

〈主人公〉
「えー……？　もう寝ちゃうのー……？」

イヴの距離が少し近づく。

●中央
「【甘々に媚び媚びな声で、優しく。主人公がまだ眠りたくなさそうなので。
だが、主人公のこのような反応に、内心では『もう一回えっちできちゃうのかも』と期待している】
んー？　何♥　まだし足りないの？」

〈主人公〉
「うん……♥　イヴちゃんとまだいちゃいちゃしたいなぁ……♥　ダメ？」

●中央
「【甘々に、うきうきと。
主人公のしてほしい事を予想して話す。
しかし、そこに特に根拠はない】
お耳舐め舐めしてほしいの？
【甘々に、うきうきと。

少しも呆れていないし、驚いていない。酔っているかどうかすらも実際は問題ではない。ただ『主人公はまだいちゃいちゃしたいらしい』という事実にうきうきしている】

ほんとに酔ってるね♥

お耳ペロペロされながら、もっかいクリイキして寝たいのか。そっか♥

【しれっとOKする。あたかも『許可してあげる』かのようなスタンスだが、実際はまたイチャイチャできてとても嬉しい】

いいよ？

【※1回※　キスする。自分から、主人公の唇に軽くキスする】

ちゅ♥」

SE2　イヴが布団の中に入る音

【最初から最後まで流す】

SE3　イヴが主人公のパジャマと下着の中に手を入れる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

SE4　イヴが主人公の股間に触れる音

【最初から最後まで流す】

イヴ、主人公の右耳に話しかける。

●右　至近距離

「【甘々に、うきうきと。
本人は普段のトーンのつもりだが、主人公の濡れ具合に、すでにかなり興奮している】
うわ♥　さっき綺麗にしてあげたのに、先生のおまんこ、もうこんなになってるし♥」

イヴ、右耳にささやく。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと甘くからかう。
しかし、いつもとあまり変わらないトーンで。
先ほどから、わざと性的な単語を口にする事で、主人公に興奮してもらおうとしている】
先生のここはほんと、気持ちよくなる事しか考えてないね♥

【少し間をあけてから。
ひそひそと、優しくえっちな事を言って、主人公を興奮させたい】

私に耳舐め手マンしてもらう事考えたら溢れてきちゃったの？

【しれっと言う】

可愛いね♥

【耳にキスする】

ちゅ♥

【優しく。こうなる事に慣れていて、聞き手が『頻繁にしてあげてるんだな』とわかるイメージで】

じゃあ、このまま仰向けでしよ♥」※

ＳＥ５　イヴが布団の上で動く音

【最初から最後まで流す】

ＳＥ６　イヴが主人公の股間を愛撫する音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【０―５秒ほどまで通常の音量で流した後、６秒目以降はごく小さな音で流す。耳舐めがメインなので、ほとんど聞こえないほどの音量が目安】

【▲１　で一段階スピードが速くなる】

【▲2　でさらにもう一段階スピードが速くなる】
【▲3　でフェードアウトする】

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【動きながら、耳舐めしやすい位置についたイメージ】
ん……♥
【優しく、少しからかうように】
すっかりハマってるよね♥　耳舐め手マン。
もしかしてこれが一番好き？」※

〈主人公〉
「イヴちゃんとしゅる事は、全部しゅきぃ♥」

イヴ、主人公の右耳に話しかける。

●右　至近距離
「【穏やかないつものトーンで復唱する。
だが、本当はものすごく嬉しい】

へー♥　私とする事は全部好きなんだ♥
【あまりトーンが変わらないが、上機嫌で】
えへ。知ってる♥」

イヴ、右耳にささやく。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しく、ひそひそと、いたずらっぽく。
『気持ちよく』が『気持ちく』になる】
じゃあ今日も、一杯気持ちくしてあげる♥」※

※ここから、右耳（向かって左）→左耳（向かって右）の順で、各3分程度（合計6分程度）舐める。その間、次の簡単な流れ（【】内の指示）に沿って、セリフを任意のタイミングではさむ。
※セリフはすべてささやき※

●●右　【すべてささやく】

【口を開けて、これから耳を舐め始めるために息を吐く。
始まりの合図のような感じで】
んっふ……。

【耳のふちを、丁寧にぺろぺろと舐める。
手慣れた様子で『いつもしているんだな』という印象にする。。
イヴは『耳舐めする時は優しく、時々えっちな事を言ってドキドキさせるのが、主人公には最も喜ばれる』ととという事を理解している。
なのでまずは、『うるさい』印象にはならない程度に、しばらく続ける】

【※3回※　ゆっくりと呼吸する。
『耳舐めを頑張るあまり呼吸が少し荒くなってしまったが、まだ余裕がある』という感じで】
ふう、ふう。はぁ……♥
【嬉しそうに。くすくすと。
『気持ちいい？』が『気持ちい？』になる。
聞くまでもなく、主人公がとても気持ちよさそうなので】
気持ちい？

【満足げに。主人公が『すっごく気持ちいい……』と頷いたので】
ふふ。よかった♥
【少し間をあけてから。
優しくからかう。
今日の主人公があまりにもえっちで、何度も求めてくれるので、とても嬉しい】
先生今日、超盛（さか）ってるね。
クリもさぁ。見えないけど、きっと真っ赤になってるよ。
すっごい熱いもん。

【耳のふちをはむはむしたり、またぺろぺろ舐めたりする。
わざと奥へは行かず、むしろひとつ前の動作に戻って、悠長にしているイメージ。
主人公の事を『盛っている』と指摘しながら、わざとじらすようにする。
あまり長くは続けず、次の動作に移行する】

【嬉しそうに。くすくすと。
主人公が焦らされている事を理解したのか、もどかしそうに、恨めしそうにしているので。
だが、なお主人公の望み通りにはしない。

一方でよりえっちな言葉を連発して、主人公をドキドキさせようとする】
先生のクリってさぁ、なんかえっちだよね。
【『自分と主人公のしか知らないので、比較サンプルは少ないけれど』という意味で言っている】
私、他の人のやつは、自分のしかわかんないけど。
私のよりおっきいし。ぷにぷにしてる感じする……♥

【耳のふちから移行するように、耳の入り口をぺろぺろする。
ここは『移行のサイン』を出す程度で、すぐに次の動作に移行する】

【少し間をあけてから。
主人公が恥ずかしそうにするので、嬉しくて、のってくる。
わざと『今、短く舐めている間に理由がわかった』みたいな様子で、優しくからかう。
もちろんまったく根拠はない】
あーわかった。オナりすぎておっきくしちゃったんでしょ♥
【嬉しそうににやにやと】
変態。
【かと思いきや、今度はしれっと普通に言う】

て事は、これからもっと大っきくなっちゃうかもね♥

【耳の中へ舌を入れていく。
舌の先で耳の穴の外側の形をなぞる。
あまり音は立てないが、ねちっこく何度か往復する。
それから次のセリフに移行し、また同じ動作をする】

【とても優しく。でもどこかにやにやと】
ん？　おっぱい触りたい？
【とても嬉しい。主人公に沢山求められたいので】
いいよ♥　触って♥
【やはりこれも『主人公が触りたがっているので許可を出してあげている』かのようなふりをするが、声が嬉しそうなので、触られたがっているのがバレバレ】
もみもみすると、お手手嬉しいんだもんね♥

【一段階耳の穴の奥へ入っていって舐める。
非常に慣れており、主人公の気持ちいいポイントを完全に理解している。
しかし、なぜか主人公に沢山邪魔されてしまう。

結果、あまりぐぽぐぽ攻めず、むしろ主人公に攻められているようになる】

【息づかいだけで表現する。
とても気持ちいい。胸を揉まれ始めたので。
いきなり、予想以上に気持ちよくて、何とか喘ぎ声をこらえる形になる】
……う♥

【息づかいだけで表現する。
少し落ち着いたように息をつく。
快感に耐える事ができたと思い、少しホッとする】
ふう。

【低く小さな声で喘ぐ。
一度耐えたと思いきや、もっと強い快感が続いて、驚く。それでも、何とか耐える。
あ。うあ。あ。ふう……♥

【高く甘い声で喘ぐ。
ものすごく気持ちいい。
主人公がイヴの乳首をぐにぐにと胸の奥に押し込んできたので。
イヴはこれが。ものすごく感じる】
あ……♥

【※5回※　荒く呼吸する。ゆっくりと、甘い息づかい。ものすごく気持ちいい】
ふぅ、ふぅ。ふーっ♥　ふーっ♥　ふうぅーっ……♥

【この時点でほとんど終わりとなる。
そろそろこちら側は終わりのサインをわかりやすく出す】

【甘々に怒る。『こんな事されたら、こちらは気持ちよすぎて、うまく攻められなくなってしまうじゃないか』という感じで】
エロすぎ……♥　ばか♥」

※ここから左耳側へ移動※
※ささやき、いったんストップ※

イヴ、左耳側に移動する。

●左　至近距離
「【主人公の耳のふちをくわえたまま話すイメージ。
そのせいで、少し聞き取りにくくなる】

「こっちもぐちゃぐちゃにしちゃうからね。

※ここから再び、次の簡単な流れに沿って、セリフを任意のタイミングではさむ。
※セリフはすべてささやき※

●●左 【すべてささやく】

【耳の外側にキスをする。
『ちゅっ』『ちゅっ』と少し音を立てて、『今攻めているのは私だ』と主張しているようなイメージ。
『うるさい』印象にはならない程度に、少し続けてセリフに移行】

【※3回※ ゆっくりと呼吸する。
耳舐めを頑張るあまり、だいぶ呼吸が荒くなってきているし、興奮している】
ふう、ふう、ふう……❤
【ふと気づいたように。
ひそひそと嬉しそうにささやく。主人公の反応が特にいいので】
あ❤ これ？ 今日はここが好き？

【ゆっくりと確認しながら、今、どんな風に触っているかを言葉にして、主人公を興奮させようとしている】
一番好きなクリのてっぺんのとこ、ゆっくり押しながら擦るのがいいんだね♥
【ひときわ優しく。あまあまに】
いいよ。しよ♥
【少し間をあけてから。
ひときわ優しく、あまあまに】
一杯擦ろ♥
【少し間をあけてから。
より良い触り方を思いつく。
『もうちょい早いの』とは『もう少し早い擦り方』という意味】
もうちょい早いのがいい？
【嬉しそうに。予想が当たったので、にやにやする】
ふふ。当たりでしょ♥

▲1　ここでSE6が、一段階スピードが速くなる

【耳の中へ舌を入れていく。

指での攻めと連動しているイメージ。
舌をしっかりと入れて、ぐぽぐぽと攻める。
少し続けてから次のセリフに移行。
この時点で、耳舐めは終わり。後はセリフメインとなる】

【優しく、にやにやと。
主人公がそろそろイきそうになってきたので、優越感がすごい】
ふふ。先生ってさぁ。いつもだいたい十分とかでクリイキするの。
知ってた？
【『そりゃそうだよね』という感じで。主人公が『知らない』と答えたので。
事実イヴも、自分の事はよくわからないので】
だよね。自分じゃ数えた事ないでしょ♥
【※マークまで優しく、にやにやと。ゆっくりと、言い聞かせるように。
自分がどれだけ主人公を好きで、理解しているかをアピールしたい】
でも、私は知ってるから。
先生がどんな風にしたら気持ちいいかも、イきそうな時のサインも。
イった後、すぐ私に甘えて寝ちゃうのも……♥
だから、絶対忘れちゃダメだよ。

先生の事、世界で一番大好きなのは私だって♥　※

【優しく、ゆっくりと。にやにやと。
主人公がもうイきそうになので、優越感がすごい】

はは♥　もうイく？　これそんな気持ちいい？　ふふ♥
わかるよ。今言った事マジなんだから。
じゃあこの強さで擦るよ……♥

▲2　ここでSE6が、さらにもう一段階スピードが速くなる

【優しくゆっくり話そうとするが、かなり興奮している。
主人公が今にもイきそうなので】

いいよ。いいよ。気持ちよくなって。
ちゃんと逃げないように乗っかってるから。

【※3回※　ゆっくりと呼吸する。かなり興奮している】

ふう、ふう、ふう……♥

【息遣いだけで表現する。
ここで主人公が達する】

ん……！

▲3　ここでSE6がフェードアウトする

【※3回※　ゆっくりと呼吸する。
ふう、ふう、ふう……♥
【少し間をあけてから。とても満足した様子で】
ふふふふふ。すごい……♥
めちゃくちゃどろって溢れてきてる♥
【最後に耳をひと舐めする】
れろっ♥
【優しく、ゆっくりと】
ふふ。気持ちよかったね♥
【※マークまでひときわ優しく、ひそひそとささやく】
このまま寝ちゃっていいよ。全部やっとくから。
【少し間をあけてから】
おやすみ、先生……♥」　※

ここでフェードアウトして終了。